

## 巻頭言

## 「夢と分業」

## “Sharing of Dreams and Collaboration for Completion”

執行役員  
開発本部・副本部長

中山 徹 矢  
T. Nakayama



「技術屋は“夢”を持って」とよく言われます。しかし「夢」という言葉は、時にはきわめて個人的な情熱を意味し、また特定の団体が意識的に共有する目標や価値観でもあり、ある場合には世代や階層がその時代に無意識に共有する将来像であったりします。それでは我々コマツの技術屋が持とうとしている「夢」とはどのようなものなのでしょうか？

半導体の世界に「ムーアの法則」というのがあります。「半導体の集積度は1年半で倍になる」というもので、インテルの設立者ゴードンムーアが1965年に唱えた仮説です。驚くべき事に40年を経た今もなお、おおむねこれに沿った進化を続けていますが、それは決してランダムな研究投資と自由競争の結果、偶然にもたらされた現象ではありません。逆に「ムーアの法則」がこの進化を実現したのです。

素材・製造設備・デバイス・最終製品メーカー等の関連業界が、まず彼の提唱した「夢」「ビジョン」を共有し、それぞれの得意分野で「夢」実現のための課題を設定し解決するという、暗黙裏に構成された巨大な分業体制の結果として「夢」は実現し続けているのです。この例からも明らかなように、実現のハードルが高ければ高いほど大規模な分業活動が必要となり、分野横断的な「夢」の共有が必要となります。乱暴に言えば、「夢」の共有には安直には解決できない高いハードルが必要なのです。

今、コマツの技術部隊はクリアすべき高いハードルに直面しています。Tier3→4へと劇的にレベルアップする排ガス規制をクリアして環境負荷の低減をはかると同時に、「環境」「安全」「経済性」「IT」の領域で「ダントツ」の特徴を有する製品を開発・提供するというのが我々の共有する課題であり、一朝一夕にはクリアすることのできない高いハードルです。

そしてまさにこういう状況こそが技術屋にとって最も幸福な瞬間なのだと思います。クリアすべき課題がなければ、誰も新規技術開発などに投資はせず開発をミニマム化して従来技術の踏襲を続けます。技術者にとっては、自らの内部に育ててきた新技術や着想の可能性・正当性を堂々と主張し「個人の夢」を「組織の夢」に昇華させるチャンスでもある訳です。

コマツの技術者や技術関連部門は、まず勇気を持ってハードルクリアに有効と思われる技術シーズとその活用シナリオを机の上に出して下さい。そしてそれらを関係部門で協力して「共有する夢」「次世代・次々世代の製品像」「ダントツフィーチャ」にまとめ上げて行きましょう。目標ブレークダウンと分業化による「夢の具現化」の前の、この「夢を創るプロセス」が絶対的に重要であり技術屋の活躍の場です。そう言った意味で、これからの5年間は正しく「技術屋の時代」と言えます。勇気と創造性を武器に、素晴らしい夢を描き、共有し、そして持ち前のチームワークによってそれを実現していきましょう。